

令和6年度 別府大学短期大学部 学長諮問会議 議事概要

日時:令和6年9月14日(土)

13:00~15:50

場所:別府大学 1号館 2階 21・22会議室

記録:内田 有紗(教務課)

学長諮問会議委員 森田 展弘 委員(大分みらい信用金庫 理事長)
土居 孝信 委員(大分県私立幼稚園連合会 会長)
神田 寿恵 委員(大分県保育連合会 理事)
田中 正樹 委員(大分県認定こども園連合会 事務局長)
緒方 雅子 委員(大分県栄養士会 会長)
宮川 久寿 委員(別府市教育委員会学校教育課 課長)
額賀 寛 委員(大分市子どもすこやか部保育・幼児教育課 課長)
小幡 英二 委員(大分県立別府翔青高等学校 校長)

学内出席者 友永 植(別府大学短期大学部 学長)
後藤 善友(副学長/学長補佐 教務担当)
高橋 俊二(学長補佐 学生担当・専攻科長)
伊藤 京子(食物栄養科 学科長)
大田 亜紀(初等教育科 学科長)
伊藤 昭博(就職委員会 委員長)
三宮 知恭(FD 委員会 委員長)
宇野 世史也(大学事務局長)
安倍 武司(短大事務局長)
友永 絵美(教務課 課長)
佐藤 里香(教務課 主任)
内田 有紗(教務課)

計20名

(13:00)

冒頭に安倍短大事務局長より開催の挨拶ならびに配布資料の説明があった。また、学長諮問会議委員と学内出席者の紹介があった。

次いで本会議の開催趣旨について、「本学の人材養成が、地域・社会の要請に応えているかについて諸関係機関(代表委員)の意見を聴取し、教育課程及び学生支援等の在り方を検証することで、今後の改善に活かしていきたい」と説明があった。

(進行:安倍短大事務局長)

友永学長から挨拶があった後、安倍短大事務局長より、本会議議題(1)から(11)までの説明が終了後、

学長諮問会議委員(以下、委員)からの意見・評価等をいただく形式で進行すると説明があった。

議事(諮問事項)

(1)令和5年度学長諮問会議報告について

安倍局長より、資料1【令和5年度学長諮問会議議事録】に基づいて、昨年度の学長諮問会議において委員よりいただいた意見・評価等について報告があった。

(2)建学の精神と本学の教育について

友永学長より、資料5【別府大学「建学の精神」について】に基づいて、「真理は我らを自由にする」の考え方の説明があった。戦争中の日本は、自由と真理が弾圧されていたため、これからの日本は自由と真理を愛する若者を育てていくことが大切であり民主的な学校を作っていこうという信念を学生指導の根本に置いていることの説明があった。

(3)令和6年度自己点検評価(令和5年度実績)について

友永学長より、資料3【令和6年度自己点検評価書】に基づいて、8つの重点項目における令和5年度の主な取組等について説明があった。特に一番大きな取組として、学生支援センターの立ち上げの準備をしたということ。学生支援力強化の取組についての項目はほぼ実施しており、加えて学生支援センターの開設準備が整ったことから当初の計画以上の成果が上がったことを評価したと説明があった。。

(4)入学者選抜の妥当性の検証について

友永学長より、資料4【2023年度在学生の修学状況と入試制度について】に基づいて、各学科のアドミッション・ポリシーについて説明があり、アドミッション・ポリシーに基づく、在学生の単位修得状況、退学者・除籍者の状況、留年者の状況について調査・分析し、妥当性を検証した結果の報告があった。

(5)本学の教育課程について

後藤副学長より、資料 6-1【別府大学短期大学部教育に関する3つのポリシー】と資料 6-2【別府大学短期大学部カリキュラムマップ】と資料 6-3【ディプロマサブリメントについて】に基づいて説明があった。教育の充実・向上に向けて3つのポリシー(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)の概要について説明があった。この3つのポリシーに基づき、学生の学習成果が目標に達しているか複数の方法(授業評価アンケート、学生の科目ごとの自己評価、教員による口頭諮問、卒業時の試験、外部テスト、卒業生アンケート、地域の皆様からの外部評価)で総合的に実施し、授業内容や評価基準等を毎年見直していること、学生が身に着けた学習成果をディプロマ・ポリシーの観点から整理した「ディプロマサブリメント」の説明があった。

(6)本学の学生支援について

高橋学長補佐(学生担当)より、資料 7-3【学生支援センターの設置について】に基づいて説明があり、全学的な組織となったこと、短大のメンタルヘルスアンケートの実施結果の報告があった。同アンケートの回答率は、94%で、その結果、面接を行う必要のある学生数、面接を行った学生数、その後新規に相談を

申込した学生数について報告があった。相談件数が昨年と比べて増加したことから同センター設立が大きな役割を果たしていることの報告があった。

(14:05)

〈休憩〉

(14:15)

(7) 本学の就職について

伊藤就職委員長より、資料 8-1【保護者のための就職ガイダンス(食物栄養科)】と資料 8-2【保護者のための就職ガイダンス(初等教育科)】に基づいて説明があった。就職率、進路状況、就職支援に関するアンケート結果、保護者懇談会にて学生が就職に関連して考えている困りごと等を保護者にも共有して保護者からのサポートにつなげていること、キャリア支援センターと学科・教員・職員が連携してサポートを行っていること、雇用主に対しても雇用主が求める学生像を把握してキャリア支援教育を行っていることの報告があった。

(8) ICT 教育(数理・データサイエンス・AI 教育プログラム)について

後藤副学長より、資料 10-1【「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」概要】と資料 10-2【「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」に係る自己点検評価書】に基づいて概要及び ICT を取り巻く背景の説明があった。令和5年度から、より実践的な内容の応用基礎レベルに対応した教育プログラムを開始したこと、同プログラムについて今年8月末に文部科学省の認定を受けたこと、令和5年度のリテラシーレベルプログラムの実績をまとめた自己点検評価報告書について説明があった。

(9) 地域連携活動について

友永学長より、資料9【地域連携・社会貢献資料集】に基づいて説明があった。地域に根差す大学として地方創生に協力しながら地域の発展に協力していきたいと思っていること、そういった活動の実績を資料9に資料集としてまとめていること、地域連携・社会貢献・自治体の各種委員・研修会の講師等色々なことをしているため、時間があるときにご覧いただけるとありがたいと思っている。本学でお手伝いできるようなことがあれば対応したいと思っているので遠慮なくお話をいただきたいとの依頼があった。

(10) 看護学部設置について

安倍短大事務局長より、資料11【看護学部パンフレット】に基づいて、今年の3月に文科省に認可申請と寄附行為の変更と保健師学校、看護師学校の指定申請書を出し、8月29日と30日に文部科学大臣から各々許可が出たという報告があった。別府医療センター、それに関連する大分医療センター、西別府病院に全面的なご協力いただけることとなっており、実習、就職にあたりそういった特色を備えているということの説明があった。

友永学長より、これから議題の順序に限らず、名簿の順番で委員より意見・評価・要望等を伺いたい旨の依頼が

あった。

(○=委員、●=学内出席者)

○(森田委員)2点お話しさせていただく。1点は学生支援センター開設の件で、当金庫も職員が悩みがあったときに金庫内人材開発部とかカウンセラーという窓口も作っているが、金庫職員には分かってほしくないということで、外部の弁護士さんとか、外部の専門の民間企業と契約を結んで相談ができるという体制をとっている。先程お話しがあったように、担任の先生には相談したくないということをお聞きしたので、学生さんの中には大学や先生にも分かってほしくないとか言わないでほしい、というようなご相談があると思うので、そのような相談の声を外部にちょっと流して、そしてもちろん個人情報もあるので、当金庫も一切誰が何を相談するかということは教えてもらえてなく、何件相談があったかというだけなので、そういうのをすると非常に学生さんからすると相談しやすい環境なのかなと思う。

それと、科目の中では地域社会フィールドワーク演習の中に入るかと思うが、お配りした財界九州の10月号で大分県の特集記事があり、現状大分県がどうなっているかとか、今後どのような方向に行くかとか、どういう課題があるかとか、地元企業が非常に地域を元気にするために頑張っているということを、同演習の科目の中でご説明していただけると、学生さんの目線も福岡や県外に行かずに大分県がよくなると思う。

●(友永学長)金庫の従業員の方に対するメンタルヘルス等のご対応大変参考になりました。私ども、人間関係学科で、困りごと等についてもともと個別に対応していたのを、今回全学的な組織に作り上げたところである。メンタルヘルスは面談の中身について口外できないという個人情報の制約はあるが、専門家に話を聞いてもらうというのは大切なことなので、カウンセラーで手が届かないところ、カウンセリングよりも直接お医者さんに見ていただいた方がいいんじゃないか、とか弁護士さんの方がいいのではないかと、とかそういったこともある。その辺りの学外の支援とどのように結びつけていくかというのはこれからの課題である。

大分県内の経済市場等のお話で、県内事情を知る機会というのがなかなかないので、ぜひそういった機会を作っていきたい。

●(後藤副学長)今、金融教育等が行われており、これはレギュラーの授業ではないが、外部講師を招き、そういった内容を講義の中で扱うような取り組みをしているところである。ご指摘のありました点はぜひ教育内容の中に含めて考えていきたい。

○(土居委員)少子化というところもあるが、学生の募集200名を確保しているのは素晴らしい。危惧しているのが、全国の養成学校が短大を中心として非常に苦慮していて、この養成校がなくなってしまうんじゃないかといった危機感があり、私どももやはり養成校と共に生きていくという形をとっているのが、市の高校へのアプローチ、地域へのアプローチ、保育所、幼稚園、認定子ども園と連携して人材確保の普及というか、地域の学びを地域で養成して地域で進んでいただくということが非常に大切である。高校の進路の先生方が大学で学ぶことはいいが、就職後、保育士や幼稚園の教員になったときに、以前は離職率も高く、処遇も非常に厳しかったところが親世代に染み付いている。現況は国の方針もあって処遇改善も進ん

で、私の個人的な目標は、地域の働き方として地銀もしくは信用金庫の職員を上回る処遇を作っていきたい。そこを少しずつ大体対等にできるようになってきたのではないかと、プラス命を守る仕事なので、平均給与等々も随分伸ばしてきた。ここを僕らもアピールしているし、大学からも伝えていただいて、進路の際に選択をしていただく連携を深くやっていくことで現場の園も非常に助かるし、養成校も学生を確保していけると思う。高校との連携を強め、この業界と一緒にあって質の向上につなげたいと思っており、今後とも連携が一番大切かなと思う。

あと、ITC だが、ITC のパソコン機器を使いこなすのは現場で必須である。ここの取組を現場と養成校と連携して進めていただきたい。

●(友永学長)確かに現在短大が 500 以上あったものが、今、全国で 272 に減ってきている。その中の、91.5%が定員割れというような状況で徐々に短大を畳む法人が増えてきて大変危惧している。大分県内には幼児教育に当たっている法人もその他沢山あるが私ども幸いにして学生さんをかなり色々なところに就職させていただいておりこれから県内でそういったポジションを維持しながらお役に立ちたい。最近の学生さんの中には確かに求人票を見るときに給与と休暇の数をまず見るという話を聞いているので、高等学校に色々なお話をしている際に、今おっしゃられたような点も十分アピールしながら進めていきたい。

ICT については、今はむしろ高等学校レベルの方が高いところにいるのではないかと感じるが、それをどういうふうに大学教育と結びつけていくかがこれからの私どもの仕事になるかと思う。

○(神田委員)私から3つございます。入試の表でほとんどの学生さんが推薦で入られていることで、推薦は素晴らしい生徒を学生として迎えられたということもあると思うが、受験という山を乗り越えてなく大学に入られて私達も本当に保育士不足でいるところで、そこでまた採用試験があまりハードルが高くないまま就職されていることもあるのか、頑張ろうとする力が少し前の職員に比べると低下しているのかな、と感じている。もちろん別府短大さんから入られる職員も学生さんも素晴らしく、今保育実習も頑張ってくれているが、推薦に対する部分がもう少し、頑張っただけで大学に入られるような形になれば望ましいと感じている。

2 つ目で、一緒に育てるという部分で、短大と保育現場を考えたときに 2 年間短大で勉強しながら保育実習に行かれて、なかなか短大で学ぶ時間が少ないのかな、実習実習で保育園から幼稚園に行き施設に行き大変だなと思う中で、保護者に対する対応という部分はなかなか 2 年間では学べないのかな、短大を卒業した後、私たちが受け入れた段階で、あと 2 年間は学生の続きというか、学びの場として育てていけないといけないなと感じている。

3 つ目で、ICT の話があったが、今チャット GPT でいろいろと解決される中で、本来の考えて書く力という部分が少し低下しているのではないかとこの前、市の学力向上委員会の中で、英作文力が低下しているということで、書けないという問題が大きくなったので、チャット GPT が進む中でも自分で書く力というのにも必要かなと感じている。

●(友永学長)一つは推薦入試で入ってくる学生が多いということである。文科省も状況は十分把握していて、推薦で入っても、学科試験等で入ってくるにしても推薦の方は、面接だけではダメで必ず学力の要素も入れなさいと、逆に学科試験で入る一般入試については学科試験だけではダメでそこにちゃんと高校での活動等を加味して総合的な判断をなさいと、そういう試験監督の偏りがないように、人柄、そういった高

校におけるところの修学状況、ご本人の専門における力、そういうものをどの入試においても万遍なく見なさい、というのが文科省の方針ですので、私どももこれまで例えば指定校推薦とか一般推薦では一般的な面接を課していたが、現在では口頭諮問という形で面接プラス専門に関する知識なり、学力なり、そういったものを試す要素を入れている、ということをしている。ただ実際に入ってくる学生さんによってはそのあたりの捉え方がどうなのかというのは十分把握していないが今後に向けて改善していきたい。

●(大田学科長)2つ目の保護者対応等の指導は、教育実習指導の中で、小学校実習、幼稚園実習、教育実習、施設実習、それぞれ担当教員の方から具体的な場面等を出しながら指導をしているところだが、実際に場になったときに具体的に状況に応じてどのように対応したらいいのかというところは、やはり学生はまだまだ不十分であろうと思っている。その点については、先ほどご意見があったように、卒業してから2年間は学生の続きというつもりでご指導いただいているということで、現場の中で実際に先生方の様子を見ながら教えていただきながら、学生にさらに保育者として力をつけていただく、ご指導を続けていただけたらと思っている。十分でない中ではあるが、実習指導の中で、また保育教職に関する授業の中で具体的に指導は続けていきたい。

●(高橋学長補佐)三つ目の書く力が乏しいというご指摘だが、私は、専攻科を持っていて、専攻科2年生が修了論文を書いているが、考えて書く力というのは本当に劣っている。大学の先生方とも話したが、私はもともと小学校や中学校をよく知っており、近年書くよりも、論破したり相手を説得したり発表したりする、そういう話すということにも小中高から力が入ってきて、なかなか書くということが少なくなっているので、できるだけ大学でも、小学校先生になるのに全然書けない。だからそこら辺も含めて授業の中で考えて書くということを取り入れていくことが大事なかないつも考えている。

●(後藤副学長)生成 AI との関係で書く力という懸念をいただいたが、その関係についてはまだ明確になっていないが、むしろ生成 AI を活用することで、より書く力が向上するような教育の方法を考えていきたい。

●(友永学長)大学では教養の部分で、クリティカルシンキングをしっかり身につけさせるということで、統一教科書を用いながらやるという方法も取っている。書く以前に考えること、人の話をよく聞いて、考えて論理的に自分の意見を組み立てて、それを文章化していくという、そのこのところの作業ができるように、これからやっていかなきゃいけないと、そういう問題意識は十分私どもも持っておりますので、これからそういう方向で努めさせていただきたい。

○(田中委員)学生支援センターの開設は、とても素晴らしいことで学生に寄り添った形での取り組みというのは非常に大事なことだと思っている。その点を受けて、8つの重点項目の中の学生支援力の強化が4ということで、本当に素晴らしいと思うが学生に対して、それぞれ具体的にいろいろと調査とかも行っていらっしゃるのかな、というところもあり、この調査の結果を受けての評価4ということであれば、本当に意味のあるものであると思っている。

それと、ICTの教育についてだが、保育業界の保育DXと言われているので、とても必須項目だと思う

ているので、今後も力を入れて行っていただきたい。ICT ももちろん大事だと思っているが、基礎的な部分で最近言われているポータブルスキルといいますか、どこの仕事でも通用する能力というのを、学生の間に少しでも高めていただければと思っています。

●(高橋学長補佐)全学的に学生に対する調査等が大体3年に1回で実施しており、今年度その年になっており、今、満足度調査に向けて項目を考えている。昨年項目が多すぎとなったので、できるだけ項目を少なくして学生の満足度を全てにわたって調査を続けている。

それからもう一つは来週私どもと学生の代表で意見交換会をこういう形で持つようにしているので、その中でもいろんな学生の思いを聞こうと考えている。

●(後藤副学長)各種業界、保育 DX に対応できるような学生ということで、授業の中では業界特有の内容等を扱っているわけではなく、一般的な内容になってしまうが、どこに行っても転換ができるような形でその基礎となる力をつけていければというふうに考えている。もし、今後学生を受け入れていただいてまだまだ足りないということがありましたら厳しくご指導いただければと思います。

●(友永学長)文科省もいわゆる専門的な力はそれぞれの専門学科でしっかり身につけさせるんでしょうけど、それをどのように汎用させるかという部分でこの辺りも同時に養う必要があるんだというような構成ですので、本学としても、それはかなり意識をして臨んでいるところである。

○(緒方委員)募集が全体的にちょっと減っているが、私は高校の方に非常勤で行っており、大学と高校の高大連携のいろいろな授業を行っていて、高校生も楽しみにしている。そこで興味が出ると栄養士になろうかな、大学に進もうかなという気持ちになるみたいなので、高大連携のいろいろなオープンキャンパスもそうだが、そういうのをたくさん増やせばいいんじゃないかと感じた。

それと、ほとんど100%就職されてすごいと思ったが、就職先が保育所認定子ども園で、保育園とか認定保育園、そういうところは栄養士の設置義務がないのでせっかく大学で勉強して栄養士として保育園に行っても、調理員としての身分である。身分的に調理員だから給料もその金額になり、とてももったいなく、大分県栄養士会でも取り上げており、大分市の保育園だけでも身分を上げて、県議の方に頼んで身分保障を栄養士さんとして保育園は就職させてくださいと各保育園にお願いをしている。保育士さんは給料もどんどん上がって羨ましいと思うが、栄養士も一生懸命頑張っているが、なかなか保育園関係に関しては栄養士が認められていなくて、養成校から国に声を上げることができないか先生方にもお聞きしたい。

それと毎回お願いだが、栄養士会の入会を今学生会員というのを作っており、年間500円で研修会とかを自由に参加していただいている。来ていただいた学生さんはやはり興味を持って栄養士会にも入っていただけて、栄養士としての仕事に就いていただけるので、そちらも先生方で進めていただけたらと思う。

●(友永学長)高大連携の取り組みについては非常に大切だと認識しており、積極的に進めさせていただいている。大学短大の進学率が60%ぐらいで、専門学校まで入れると、80%を超す。全入状態に近い状況の中で、これからはそれぞれの生徒さんが自分の将来を考えながら高等教育機関に進みたいかということ

を自分たちの目で確かめていただくと、そういうようなことがこれからは必要なことじゃないのかなと、高等教育機関に行こうと思えばどこでも行けるような時代になったときに、自分にとってどの高等教育機関が一番ふさわしいのかということを自分たちの目で確かめていただく。そういった意味で高大連携は非常に重要な要素だろうと思っており、本学としても高等学校のご協力をいただいて一生懸命進めている。

●(伊藤学科長)2 つ目の栄養士の処遇についてだが、今年就職した保育園、子ども園に関しては、ほとんどの方が身分は栄養士ということで就職をしている。就職先に私も訪問させていただいたら、食育もしてもらっている。栄養士プラス栄養教諭の免許をもって就職している学生もいるので、食育の部分や、発注や帳簿整理、そして給食だより等々の仕事をさせていただいているところもあるので、午前中は調理に携わる時間が多いが、その他の時間では本来の栄養士として学校で学んだことが活かせる仕事もさせていただいている現状ではないかと訪問した感じでは思っている。

今日まさに管理栄養士の国家試験の支援講座をやっているが、4 月に就職したばかりの学生も数名参加しており 4 年後を見据えて勉強したいと、また職場の方からは是非管理を取ってほしいということで来たというものもいるので、職場の方、職場が栄養士というか、卒業生に期待しているところは大きいものをいただいているのではないかと思いますながら講座を進めている。

栄養士会の入会は、さらに積極的に進めていきたい。アナウンスもしているので、もっと努力していきたい。

●(友永学長)私ども養成学校としてできることがあれば、処遇改善についての働きかけをさせていただきたい。

○(小幡委員)全国的に非常に人が不足している状況だが、教育の中で県内に軸足を置いて 9 割が県内の学生でそのままほぼ県内に残って就職していくという形なので、大切な環境になるのではないかと思います。一方で教員採用試験自体は少しでも人を確保するために時期がどんどん早くなっている。その中で、入学して 2 年間で教員として育成していくのは非常に難しいのかなという感じを持つ。先生になりたいという志を持った人が、専門的に学ぶことによって不安になっていくような形になってしまったら非常に良くないので、就職するだけの支援ではなくキャリア支援センターという、先ほど就職をするだけではなくキャリアを支えていくという支援センターが機能しているということを聞いて、素晴らしいなという感想を持った。

また、学生支援センターというのもいろいろな相談内容を把握して、そしてそれを活かしていくということで、このキャリア支援センターと学生支援センターこの 2 つが非常に今後充実していくことによって、より良い学生のサポートができるのではないかと感じた。一つだけ気になったのが、総合型入試で入ってきた学生が高学年になるにつれて退学が増えてきているという傾向があることを聞いて、高等学校においても、学力だけではなくて課題解決能力を持って、そこを活かした総合型入試に対応していこうという形を進めている中で、そのミスマッチというのがどういったところで出てしまうのか、そこと退学はどういう関係があるか、というのをできれば今後いろいろな研究をしていただいて、高等学校と情報共有をしながら、よりミスマッチがないような形ができればいいと思う。

●(高橋学長補佐)本当に 2 年で教壇に立つということは非常に難しい分、経験年齢も少ないから、採用試験でなぜ短大で受けるんだとか、短大で受けられたら困るという面接官がいたりして、20 歳でやっと教員

をしているという状況ではあるがその学生によって差があると思う。大学で研究会をバリバリやってちょっとぐらいきてもうまく受け流す学生は成功している。ただ、非常に真面目で、本当に自分の責任感を感じすぎる子が、やっぱりメンタルダウンしやすくなっている。できる限り支援をしていくというか、ある先生が中心になって卒業生を呼んでみんなでそういう悩みを話し合う会を、今年度初めて実施したので、今後ともできるだけそういうことで卒業生をバックアップしていきたい。

●(友永学長)2年で採用試験に合格しても、その後合格の資格を2年3年延ばしていただいて専攻科に行ってそこで2年間勉強して採用試験を受けるという学生もあり、短大の2年を卒業してすぐに受ける学生もあり、専攻科の途中から採用されるという学生もいる。専攻科もそういう学生に現場での経験を予備的に積ませるというような意味合いを持たせて、採用試験の合格の資格を年を越してまで有効にしていたければありがたいという要望もさせていただいている。

総合型選抜については、実態としては分析した結果が出てくるが、総合型選抜で入学してくる学生さんの数がそれほど多くない。それで2、3人が仮に留年や、退学すると、%が一変に跳ね上がるので、そういうようなこともあると思う。昨年の傾向としてそういうものが出たので、様子を見ながら検討してみたい。

○(額賀委員)大分市では様々な保育士確保の取組を行っており、学生の皆さんに市内の教育、保育施設の特色や魅力を発信する保育の仕事セミナーを毎年2月に開催している。立ち上げ当初から短期大学の先生方にご協力をいただいております、昨年度も多くの学生の皆さんに参加をしていただいた。

私が最近気になっているのは本市調査の離職率で、採用1年未満に、離職をする方が22%いるという数字である。これは年齢問わず聞いているので、新卒者に限ったことではないが、新卒者の方もいらっしゃるのではないかと考えている。この離職率の高さは保育現場においては保育士の専門性であったり、保育の質の向上を妨げるものになっていくのではないかと大変危惧をしており、保育士確保を大分市も取り組んでいるが、保育士の離職防止の取り組みも必要であると感じている。離職防止対策についてまずは、第一に雇用主の方がしっかりと取り組んでいただく必要があると思うが、学生さんの就職に当たってキャリア支援センター等を中心にしっかりと学生さんを送り出しているが、学生の適正に見合った就職先をしっかりとご指導いただいているものと思っているが、もし特徴的な指導方法があれば教えていただきたい。

また、これはある調査だが、1年以内に退職した者の8割はまた保育現場の方で再就職をしているといった数字の方もデータがあるので、学生を送り出した後になるが、卒業生についてもぜひ再就職のサポートをキャリアセンターを中心にしていただけると私たち保育士保育現場の方は大変助かる。

●(友永学長)卒業後の離職状況というのは、なかなか大学として把握するのは難しいが、離職された方が再就職されるようになったときは卒業生であればきちんとキャリアセンターの方で十分支援させていただいております。

●(伊藤就職委員長)昨年度の保育所アンケートの結果で、132件の保育所さんに対して60件回答があった。その中で令和3年から令和5年の間で、1年以内に9名、3年以内に12名、退職の数値が出ている。理由は転職とは書いてないが、一身上の都合とか、結婚による退職とかが挙げられるがその辺の取組に関

しては処遇改善の部分もあると思うし、就職した後に、自分が求人票を調べて就職したが、自分がやろうと思っていたことと違ったとか、いい条件の誘いがあり転職している可能性はあると思う。マッチングの問題があるかと思う。学生たちが求人票を見て選ぶ際、実習に行って決める際、入ってくる人はわからないことだが、本当にそこでうまくやっていけるのか、という夢を持った部分が実際現実的にどの程度自分たちで実践できるかというところもあるし、それぞれのスキルの問題、コミュニケーショントラブルも含み、注意される。それに対する対応力が弱い、その辺をしっかりとした土台を築き上げる教育というものも今後実際うちでは基礎練習、進路指導という授業もあるので、この中でキャリア支援センターとも協力をしながら今後も就職に向けたり、満足度を上げるという体制作りもしていきたい。

●(大田学科長)現場に出た後、横のつながりが取れる時間はすごく減る。今年の夏に小学校中心ではあったが、今現場に出ている小学校の先生方や本学の専攻科の学生に参加していただいて、横同士でつながり、共有し合う場を持ち、すごく大事だなと思った。これからの初等教育科でも、もっと保育現場でやったり幅を広げて、みんなが本学に戻ってきて、それぞれの立場で悩みを共有できる場が年に2回でもあると退職率の低下にはつながっていくのではないかと考えており、そのような動きでこれから進めていきたい。

○(宮川委員)別府大学短期大学部の方にはマイスタープロジェクトということで非常に志を持った学生さんを養成していただき、即戦力を養っていただいていることに大変感謝申し上げる。

実績の自己点検評価の、教育力の強化の中の批判的思考力が、これから益々重要になる。様々な情報が溢れる中で、本当に裏側を見抜く力は、絶対に欠かせない。この部分を伸ばしていただけたらと考える。

2つ目の学生支援力の強化、学生支援センターを立ち上げて、そして学生に寄り添った支援をしているところが大変素晴らしい。

あとは就職力の強化で、その成果が就職率 100%、そして大分の就職につながっているということを考えると、別府大学短期大学部さんが進められているキャリア教育というのが間違いないものだと感じる。

あとは ICT の部分で、小中高では文部科学省から出された令和日本型教育というものがある。AI ドリル等を使い子どもたちがつまづいたところを個別に見取って、復習させながら必要な力をつけていくと考え、みんなで何か一つ課題解決に向けて取り組むという共同的な学び、この二本柱で、小中学校 1 人 1 台タブレット端末が対応され欠かせない。別府市はロイロノートを使って共同的な授業をつくっている。小中学校の教員を目指す学生さんたちに対して、ICT 機器を活用した指導法などを大学の中で取り組んでいるか教えていただけたらと思う。

最後に一つお知らせです。9 年度から現在別府市立幼稚園 14 園あるが、これが 7 園に統合される。幼稚園の適正化もあるが、別府市立幼稚園と、別府市立保育所と認定子ども園と連携をしながら見るという流れがある。今後、役割をきちんと明確にしてお互いに連携を取り合いながら保育を進めていこうという部分であるので、少し気にしておいていただけるとありがたい。合わせて職員の適正な配置もある。場合によっては別府大学短期大学部のほうも、そういった保育園とか幼稚園教育とかを目指す方もたくさんいらっしゃると思うので、これから採用を適正な人員の確保に向けて別府市も動いていくので、少しそのあたりの情報をお取り入れいただけたらありがたい。

●(三宮 FD 委員長)今別府大学で、ロイロノートを管理者としてロイロノートの会社から承っている。ロイロ

ノート自身は3年前から実際に学生に使って授業をしている。各指導や全部の授業、幼児教育についても、タブレットは子どもたちが写真を撮ったりして扱っているので、全員の先生方でも研修をしながら、授業の中でやっている。学生には先生方がまず広げて、ID もありがたいことに、教職を目指す、食物栄養科の学生も含めて全員無料で使える。教育実習生が授業に行っているのを見ると、実際に使って授業をしているので、そこだけは採用試験の時にも使えますよ、と堂々と言いなさいと言っている。

●(後藤副学長)教員養成の全体としても、ギガスクールが始まったタイミングで各大学の養成に対して法改正が行われ、指導法の中で ICT を必ず活用するようにシラバスに明記をして取り組むようにということと、ICT の活用と理論という新しい科目も設置され、各大学に開設が義務付けられ本学も対応している状況です。なので、これから卒業する学生はどんどん使えると思いますので、よろしくお願いいたします。

●(友永学長)この他こういったことについてお話しいただくということがございましたら、お願いします。

○(森田委員)我々新卒の採用を受ける側からのことだが、短大2年間、大学4年間、どこまで成長させるかという限界があると思う。例えば役割分担があると思うので、就職で受ける側、行政や学校の先生方もそう思うし、民間もそうだが、リスクリング、職業能力をいかにアップしていくかということを採用する側がしっかりやっていて、これは両輪だと思う。大学が4年間一生懸命指導してもらった分が、すぐ就職したときに、あと職業能力の開発を誰もしてくれないとなったら、壊れますので。学校教育で先生になった方々の職業能力アップのことも考えていただきたいし、民間は民間でそれがちゃんとやっていかないと無理だと思っているので、全部が全部大学短大の責任であると受ける側の責任もあると最後ちょっとお話しさせていただきたいと思う。

●(友永学長)大変ありがたいお言葉いただき、恐縮であります。私どもも、短大2年で卒業して現場に立つと、学生さんにとって難しいところもあるので、そういう学生さんが学校でもう一回リスクリングといいますが、そういったことをやるような機会も今後作っていく必要があるなということは話をしております。

●(後藤副学長)例えば保育所幼稚園の業界であれば、処遇改善のために様々な研修を大学の方で県から事業を受託して、卒業生に対し教育の場等を提供しているところである。細々だがそういった活動をしているが、やはり大学だけでは限界があるので、社会で学生を受け入れていただく、各所でそういった体制を整えていただければ、またそういった体制があることを前提に大学でせめてここまでやってくれというようなご意見をいただきながら、教育をできるだけ先鋭化、確実なものにしていければなと考えている。

●(友永学長)送り出した側も受け取っていただいた側も協力しながら、そういったリスクリングをしながら、子どもたちに益になるような体制を作れたら一番いいんだろうなと思っている。先生方にいただいた貴重なご意見を真摯に受け止めて、来年は改善に向けたご報告ができるようにしたい。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

(15:50)

〈閉会〉

配布資料

- (1) 令和5年度別府大学短期大学部学長諮問会議議事録……資料1
- (2) 令和6年度事業計画……資料2
- (3) 令和6年度自己点検評価報告書……資料3
- (4) 2023 年度在学生の修学状況と入試制度について……資料4
- (5) 別府大学「建学の精神」について……資料5
- (6) 別府大学短期大学部教育に関する3つのポリシー……資料 6-1
別府大学短期大学部カリキュラムマップ……資料 6-2
ディプロマサブリメントについて……資料 6-3
- (7) 満足度調査報告書(令和3年度実施分)……資料 7-1
学生のサークル及び研究会活動……資料 7-2
- (8) 保護者のための就職ガイダンス(食物栄養科)……資料 8-1
保護者のための就職ガイダンス(初等教育科)……資料 8-2
- (9) 地域連携・社会貢献資料集……資料 9
- (10) 「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」概要……資料 10-1
「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」に係る自己点検評価書……資料 10-2
- (11) 看護学部パンフレット……資料 11
- (12) 参考資料
 - ① 大学案内 2025
 - ② ニュースレター
 - ③ 『Be-News』
 - ④ 短期大学部食物栄養科令和5年度管理栄養士国家試験受験のための支援講座
 - ⑤ 認定絵本土養成講座チラシ
 - ⑥ 令和6年度別府大学短期大学部における大分県幼児教育センター(教育庁内)の養成及び委託に係る研修講座日程について